

J.ハイドン研究における近年の変化について

飯森 豊水*1

ウィーン古典派の作曲家 J. ハイドンの研究においては、20 世紀終盤に明確な変化があったことが一部で指摘されている。

ハイドン研究史を概観すると、19 世紀後半に C.F.ポールによってハイドンに関する学問的研究が始まり、1930 年代のデンマークの研究者 J.P.ラルセンを先駆として、戦後には活発な資料研究が展開された。20 世紀の後半は、組織的で体系的な資料研究と、その成果としての学問的校訂楽譜による「ハイドン全集」をはじめとする諸資料の刊行が中心的課題となった。その課題が一段落する世紀の終盤になって明確な変化が起り、新たな研究の地平が拓かれた。しかしその目指すところはまだ明らかとはいえない。小論では、この変化を分析し、従来のハイドン研究にはなかった新しい研究の可能性を検討する。

..... キーワード

J.ハイドン 研究 変化 全集

序

ヨーゼフ・ハイドン Joseph Haydn (1732-1809)は、18 世紀中葉から約半世紀続いたウィーン古典派を、後続する W.A.モーツァルト Wolfgang Amadeus Mozart (1756-91)や L. v. ベートーヴェン Ludwig van Beethoven (1770-1827)とともに代表する作曲家と位置づけられている。しかし作曲家の没後、フランス革命とそれに照応するかのようなベートーヴェンの新しい音楽が人々の音楽趣味を一変した。ベートーヴェンは 19 世紀の、とりわけドイツ人作曲家たちの規範となる一方、ハイドンには、「パパ・ハイドン」の愛称が付されて「無邪気で古風で気

力に欠ける」といったイメージが形成された。これは主として、19 世紀のハイドン受容が、作曲家晩年のオラトリオや交響曲等の一部作品に限定されたためであり(Jones 2002: 336f)、また、G.A.グリーゼンガーや A.C.ディースら最初期の伝記作家たちがハイドンに行ったインタビューの内容が、高齢の老人特有の思考を反映していたためと考えられる(Webster 2005: 30)。

後述するように、19 世紀後半に始まる本格的なハイドン研究は、そうした固定観念を払拭する役目を果たしてきた。とりわけ 1930 年代から 20 世紀終盤までは精力的な資料研究が行われ、全世界に存在するハイドン関連の楽譜や文書が国際的な研究者たちの協力の下で調査、評価、刊行され、生涯と創作に関する真正な作曲家像を描出すべく努力が払われた。そうした流れの中で、近年における研究テーマの多様性は、ハイドン研究史における新局面を象徴しているように思われる。

ドイツ、ケルンのヨーゼフ・ハイドン研究所 Joseph Haydn-Institut が発行する研究誌『ハイ

2016 年 10 月 4 日受理

On a recent change in the Haydn research

*1 Toyomi IIMORI

開智国際大学リベラルアーツ学部

ドン研究『Haydn-Studien』では、1974年以來、ほぼすべてのハイドン研究関連の文献目録を作成してきている(Brown and Berkenstock 1974: 173-352; Walter 1985: 205-293; Walter 1992: 173-238; Raab 2002: 79-216; Raab 2011: 119-325)。1998年から同研究所の学問的責任者を務め、最新の文献目録を担当しているA.ラーブ Armin Raabは「作品全集完成後におけるハイドン研究の展望」と題する論文で次のように述べた。「ヨーゼフ・ハイドンの生涯と作品に関する研究は、この数年間で多様性を増してきた(Raab 2010a: 243)」。この指摘は、上記のハイドン目録で確認できる従来からの多様性を考慮しても、この数年の多様性の拡大が顕著であることを物語っている。

また、アメリカのJ.ウェブスター James Websterは、「最近に至るまで、ハイドンが何か一貫した美学のようなものを保持していたと提唱するならば、奇妙なことと思われたかもしれない(Webster 2005: 30)」と述べる。英語圏を代表する研究者向けの音楽事典で「ハイドン」の項目を担当するなど(Webster 2001)、今日を代表するハイドン研究者のひとりとして知られる彼は、とりわけ近年の研究環境の変化に敏感であるのかも知れない。1982年のウェブスターは、「ランダム以降のハイドン伝の展望」と題する論文で、ハイドンの伝記研究が、他の作曲家に比べて質的に劣っていることを指摘し、嘆じていたのである。すなわち、ハイドンの伝記にモーツァルトやベートーヴェンのような活力ある人間としての個性が感じられないのは、従来のハイドン伝記研究自身に原因があり、今後、新資料の発見があまり期待できない以上、この問題は容易に解決できないのではないかと危惧していたのだ(Webster 1982)。その後23年を経過した2005年の論文では、ハイドンの創造の根底にあるさまざまな表現上の特質を分析し、人柄を説明し、最後にはカントの天才概念を援用しながらハイドンの天才を語るに至った。これは、ウェブスターがこの間のハイドン研究の変化を認識し、その成果を取り入れた

証左とはいえないだろうか。

さらに、アメリカのM.ロウ Melanie Loweは、ハイドンの没後200年にあたる2009年の翌年、近年のハイドン研究の状況に関して次のように記した。「記念年を終えてみると、この年に過渡期としての意義を認識することができる」。そして、新傾向の研究の特質を挙げたあとで「こうしたことは一世代前にはほとんど想像できなかった」と述懐した(Lowe 2010: 8)。記念年の2009年には世界規模でハイドンの作品の演奏、関連イベント、関連書籍の刊行、学会での特集や関連シンポジウム、国際的共同研究などが集中したため、研究者たちもこれを特別の機会と捉えたことは想像に難くない。しかしそれ以前から、ハイドン研究の流れが大きく変化していたと彼女は指摘しているのである¹⁾。

この3人の言説からは、近年のハイドン研究には新しい傾向が生まれているとの認識が読み取れる。しかしその表現は三者三様であり、必ずしも彼らの指摘に一致した内実が認められるかどうかは明らかでない。おそらくこの新傾向の解明には多角的かつ慎重な分析が必要となるだろうが、小論では、まずハイドン研究史のアウトラインを辿りながら、近年の変化の背景にあるものを探る。そして改めて上記3人の論文の中から今後の研究に向けた可能性等に言及する部分を抽出して分析し、その意味を考察することとしたい。

なお、便宜上、以下ではハイドン研究史を4つの時期に区分することとする。すなわち、1. 同時代(19世紀初頭)、2. 研究初期(19世紀後半から1930年代前半)、3. 本格的な資料研究の時代(1930年代後半から1990年頃)、4. 新しい傾向(1990年頃以降)である。なおこの区分は、研究史に対する筆者の視点を反映した便宜的なものと捉えていただきたい。

ハイドン研究史の検討

1. 同時代(19世紀初頭)
 - 1.1. G.A. グリージナー

ドイツ、シュトゥットガルト生まれのグリージンガー Georg August Griesinger (1769-1845) は、チュービンゲンで神学を学び、1791年に初めてウィーンを訪問した。一時ウィーンを離れたが、1799年に戻り、ザクセン公国の在ウィーン大使 J.H.A.v. ショーンフェルト J.H.A.von Schonfeld 伯爵の息子の教師となり、まもなくザクセン公国の外交関連の任務に就いた。彼は音楽に関心があったことから、週2日の外交官として仕事の傍ら、著名な出版社であるブライトコップフ・ウント・ヘルテル Breitkopf & Härtel 社の在ウィーン代理人となって、ハイドンやベートーヴェンの音楽を担当した。同社の依頼を受けてハイドンを初めて訪問したのは1799年、作曲家が60代半ばのことだった。ヘルテル宛の書簡で、グリージンガーは作曲家のことを「陽気で若々しく、(中略) 慎み深く質素」とであると伝えている。ふたりの間には信頼関係が生まれ、面会の回を重ねるとともに、ハイドンは同社を最も重要な出版社として関係を深めた。

ふたりの間で交わされた相当量にのぼる往復書簡は第二次大戦で消失したが、主要部分の抜粋や要約は、後述するポールらが著作に採録している。これらの書簡はハイドンの姿を活写しており、またブライトコップフ・ウント・ヘルテル社との取引の内容、ウィーンの音楽状況を伝えている。ハイドンが彼に信頼を寄せるようになったのには、外交官や教師を経験したグリージンガーの知性や豊かな経験、誠実な人柄が貢献したことだろう。

グリージンガーのハイドン伝は、1809年の作曲家の没後まもなく本編7回と補遺の合計8回に分けてライプツィヒの「一般音楽新聞 Allgemeine musikalische Zeitung」に連載された。翌1810年にはさらに内容を拡充させて、伝記としてブライトコップフ・ウント・ヘルテル社から出版された(Griesinger 1809, 1810)。この著作はエステルハーゼ侯爵家時代の宮廷での活動、およびロンドン訪問のことが冷静で客観的な文体でまとめられており、ハイドンに関する最初期

の最も信頼できる評伝と考えられている(Jones 2002: 122f; Friesenhagen 2010: 282f)。

1.2. A. C. ディース

ディース Albert Christoph Dies (1755-1822) は風景画家であった。ハノーヴァーに生まれ、デュッセルドルフで学んだのち1775年にローマに移り1796年まで滞在した。この間、1787年にはゲーテの知遇を得て風景スケッチ1枚に彩色している。

ローマを離れてからは、ザルツブルクとウィーンに滞在し、1805年からニコラウス・エステルハーゼ 2世 (ハンガリー名 Esterházy II. Miklós¹、ドイツ名 Nikolaus II Esterházy、1714-1790) 侯爵の仕事 시작했다。内容は、アイゼンシュタットのエステルハーゼ宮殿の風景および庭の絵画の制作および修復であった。絵画では1806年から12年までの間に6枚の大型の油絵を残している。また1806年にはウィーンの帝室アカデミー教授の職に就いている。

同僚で彫刻家の A. グラッシ Anton Grassi(1755-1807)からハイドン伝の執筆を提案されたのを契機に、資料の収集を開始するとともに、作曲者との交流が始まった。ディースは、1805年の4月からウィーン郊外(当時)のグンペンドルフにあるハイドン宅に通い、著書を1810年に上梓している(Dies 1820)。

内容は高齢の記憶の衰弱したハイドンの主観的な回想が多く、愉快的逸話とともに、憂愁を伝えている(Jones 2002: 65; Walter 2010: 153)。

1.3. G. カルパーニ

カルパーニ Giuseppe Carpani (1752-1825) は、イタリア出身の文筆家であった。ロンバルディア地方に生まれ、ミラノのイエズス会の施設で教育を受けた。1796年にウィーンに移住すると間もなく劇作家、詩人、台本作家、さらにフランス語およびドイツ語の文学作品やオペラ台本の翻訳家として活躍した。ハイドン作品のうち、オラトリオ《天地創造 Die Schöpfung》や皇帝賛歌《神

よ、皇帝フランツを守りたまえ *Gott, erhalte Franz den Kaiser*》のイタリア語訳を残している。

カルパーニは1796年頃にハイドンと出会い、1808年4月から1811年3月までの日付を持つ17通の書簡形式で伝記を1812年にミラノで出版した(Carpani 1812)。彼がこの中で述べるには、写譜家のヨハン・エルスラー *Johann Elbler*、テノール歌手のフリーベルト *Joseph Friberth*、グリーンジャー、ハイドン最初の弟子マルティネス *Martines*、ヴァイオリン奏者で作曲家のピッフル *Pichl*、ハイドンと交友があり外交官で音楽の支援者でもあったヴァン・スヴィーテン *Van Swieten* 男爵等との会話をもとにしているという。内容は、グリーンジャーやディースの著作を参考にしながらも、音楽美学や音楽理論に及ぶ議論を展開するなど伝記を逸脱する部分が多く、資料的価値は劣っている(Jones 2002: 31f.; Jacobs 2010: 141)。

2. 研究初期 (19世紀後半から1930年代前半)

2.1. C. F. ポール

ポール *Carl Ferdinand Pohl* (1819-1887)はドイツのダルムシュタットに生まれ、最初は楽譜の彫版を、1841年にはウィーンで *S.ゼクスター Simon Sechter* から作曲を学ぶ。かつてのハイドン宅があったグンペンドルフのプロテスタント教会でオルガン奏者を勤めたのち、音楽研究に転向。1863-1866にかけてロンドンで音楽教師および音楽評論を行う傍ら、資料を収集して、『ロンドンのモーツァルトとハイドン(Pohl 1867)』としてまとめた。1879年刊行の『グローブ音楽事典』ではハイドンの項目を執筆し、1954年版(第5版)まで改訂を重ねた。

1866年にモーツァルト研究家 *O.ヤーン Otto Jahn* の推挙で、ポールはウィーン楽友協会文書保管所の学芸員に任命される。ヤーンは全4巻の『ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト *Wolfgang Amadeus Mozart*』で、その後のモーツァルト研究を基礎づけた研究者だった。ポールはハイドン伝の最初の2巻を、それぞれ1875年

と1882年にブライトコップフ・ウント・ヘルテル社から出版した。しかし第3巻を完成させることなく没したため、文書保管所の後任 *E.マンディチェフスキー Eusebius Mandyczewski* が作業を継承し、その後継者である *H.ボートシュティバー Hugo Botstiber* が1927年に完成させた。この全3巻は、ハイドンに関する最初の包括的な研究となった(Pohl 1875: Pohl 1882: Pohl 1927)。

ポールはそのほか資料集(ウィーン、楽友協会蔵)を遺した。そこには、もはや現存しない文書のスケッチが多く含まれるが、中でも第2次大戦で消失したグリーンジャーとブライトコップフ・ウント・ヘルテル社との往復書簡の抜き書きは、ハイドンの伝記研究にとって貴重な資料である。資料にはほかに、ハイドンの作品の主題付き目録、ハイドンの多数の書簡やエステルハージ古文書を筆写したもの、ハイドンの作品を写譜したもの、ハイドンが作曲したオペラの台本の筆写などがある。ポールは研究環境に恵まれて資料研究を推進し、19世紀のハイドン研究に多大な貢献をした(Jones 2002: 287f.; Raab 2010b: 594)。

2.2. K. ガイリンガー

K.ガイリンガー Karl Geiringer (1899-1989)は、1923年に楽器学で博士号を取得し、1930年からウィーンの楽友協会文書保管所の学芸員となった。ナチスの権力掌握ののち1938年にイギリスに亡命し、1940年にロンドンの王立音楽大学教授となった。1941年にはアメリカのボストン大学教授に就任している。当時の受講生に後述するランドンがいた。

著作『ヨーゼフ・ハイドン』は、権威ある学術叢書の1巻として1932年に刊行され、1946年には英訳された(Geiringer 1932, 1946)。内容は主に従来の研究を継承したものではあるが、ポールのハイドン研究には外国語への翻訳がなかったこともあり、版を重ねながら長くハイドンの代表的概説書としての地位を保った(Jones 2002: 115; Raab 2010c: 594)。

3. 本格的な資料研究の時代 (1930 年代後半から 1990 年頃)

3.1. J. P. ラールセン

ラールセン Jens Peter Larsen (1902-1988)は、コペンハーゲンで数学と音楽学、オルガン演奏を学び、コペンハーゲン大学で音楽学の教鞭を執った。資料研究に専心し、その成果である博士論文を 1939 年に『ハイドン伝承 Die Haydn-Überlieferung』として上梓した。

従来、「ハイドンの作品」として伝承された作品の真贋問題を検討する際、作品の音楽的特徴から研究者が主観的に判断することがしばしば行われていた。しかしラールセンはこうした様式に基づく判断を排除して、科学的・実証的な方法に従う必要性を説き、そのための基礎研究を行った。上記の著作では、作曲者の自筆楽譜に関してはその所在や真正性の判断方法が、筆写楽譜に関してはその種類、真正性の判断基準、さらに信頼性の高い写譜家、およびハイドンの弟子による筆写楽譜等の所在を詳述している。加えて、作品の成立年代の判断基準、楽譜用紙やすかし、信頼できる作品目録についての説明をしている。

その 2 年後にはハイドン作品の真正性の判断に重要な手がかりを与える 3 つの作品目録のファクシミリ版を刊行した(Larsen 1941)。この 2 冊が、20 世紀のハイドン資料研究を基礎づけることになるが、その成果が現れるには、第 2 次大戦の終結を待たなくてはならなかった。終戦後、後述するように、ラールセン門下のホーボーケンとランドンが重要な貢献をすることになる。

ラールセンはさらに、組織的、継続的にハイドンの学問的校訂楽譜を出版するために、ケルンにヨーゼフ・ハイドン研究所を設立し、1955 年にその初代学問的責任者となった。彼の許でハイドン全集は 1960 年までに最初の 8 巻を出版している(Jones 2002: 205; Raab 2010d: 451)。

3.2 A. v. ホーボーケン

ハイドンの創作を一覧できる作品目録は、作曲者の生前から存在していた。ハイドン自身による

ものをはじめ、エスエルハーヅ侯爵に仕える写譜家、出版社などによるものが今日まで伝承されている。しかしこれらはすべてを網羅するわけではなく、体系的でもなく、時に誤りもあった。19 世紀の音楽事典等で作品目録を掲載することもあったが、これらも同様な欠点を免れ得なかった。

ホーボーケン Anthony van Hoboken (1887-1983)はハイドンの楽譜等の資料を大規模かつ体系的に収集した。1927 年から自筆楽譜を写真で複製し、保存を開始した。1934 年には所有するハイドン作品の印刷楽譜をもとに目録作成を開始し、1000 枚前後のカードを数えるまでになった。その結果はハイドン作品目録として結実し、最初に 1957 年の第 1 巻 (器楽作品編)、続いて 1971 年の第 2 巻 (声楽作品編)、そして 1978 年の第 3 巻 (作品集、作品番号一覧、出版社一覧、被献呈者一覧等のデータ集および追補と訂正) で完成を迎えた(Hoboken 1957-78)。

例えばその第 1 巻では、当時ホーボーケンが知り得たハイドンの作品すべてを、交響曲、ディヴェルティメント、弦楽四重奏曲等とジャンルごとに分類し、おおよその成立順に沿って固有の番号を割り振り、成立時期を記し、各楽章の冒頭部分を楽譜で再現し、小節数、真正性を証明する資料、当該作品の調査し得たあらゆる楽譜についてのデータ、作品についての注釈等を詳述した。また、真正性の疑われる作品については、混乱が起きないように別系統の番号を割り振った。この目録はハイドン研究史上画期的なものとなり、今日では、ハイドン作品はホーボーケンの名とこの目録の番号で呼ばれるのが一般的である (例を挙げると、弦楽四重奏曲第 1 番とされる作品は、第 3 系統の第 1 番と分類され、Hob.III:1 と表記される)。しかし、その後の資料研究の進展とともに、中には偽作が含まれることや、作品の番号と成立の順番に不整合があること、作品ごとにつけられた楽譜資料一覧の不完全性などが明らかになってきている。

3.3 ヨーゼフ・ハイドン研究所と F. フェーダー

ヨーゼフ・ハイドン研究所のホームページには、次のような説明がある。「1955年にケルンに設立された本研究所は学問的なヨーゼフ・ハイドンの作品全集の刊行を行っている。そのほか『ハイドン研究』を出版するが、ここにはハイドン文献一覧が含まれる」。作品全集は1958年以来、これまでにたびたび完成時期を予告しながら延期を繰り返し、現時点(2017年2月)では、楽譜5冊、校訂報告6冊、補巻および索引を残すのみとなった。また、『ハイドン研究』は、1965年以来、数ヶ月ないし4年程度の間隔をおいて刊行されており、現時点での最新号は2014年12月に発行された第11巻第1号である²⁾。

19世紀中に学問的校訂楽譜による作品全集を刊行し終えたバッハやモーツァルトの場合とは異なり、ハイドンの作品全集は過去に2回(1907-33年にブライトコップフ・ウント・ヘルテル社、1949-51年にボストン・ウィーンのハイドン協会)試みられたがいずれも中断している。ハイドンの場合、作品数が膨大であること、初期の作品についての正確な情報が少ないこと、自筆楽譜で伝承される作品が少なく、誤りの多い筆写楽譜や印刷楽譜を参照せざるを得ないこと、加えて、生前の人気を反映して「ハイドン作」とする偽作が多く混乱が大きいことなどが全集の完成を困難にしていた。さらに、20世紀中葉になって改めて作品全集の刊行を目指す際には、バッハやモーツァルトの場合のように「旧全集」が存在していたわけではないので、ヨーゼフ・ハイドン研究所は基礎的な研究のために人的、時間的、資金的に膨大な資源を費やす必要があった。

資料収集の作業では、ハイドンのすべての作品や編曲(さらに必要に応じて一部の周辺作曲家の作品)、関連文や文献等を、原本またはマイクロフィルムで収集し、作品カードおよび資料カードの2系列で整理・保管した。これらは常に最新の研究状況にあわせて更新された。世界中から収集したマイクロフィルムは360,000枚を数えたという。これら資料の分析を通して初めてハイドンの創作の全容解明が進むといえるため、その結果

として出版された校訂楽譜は従来出版されたハイドン作品の楽譜とは比較にならない信頼性を得ることができた。

同研究所の所長や専従研究員には、ハイドン研究者、とりわけ資料研究を専門とする研究者が名を連ねてきた。しかし発行する校訂楽譜作成や『ハイドン研究』には世界中のハイドン研究者が協力し、寄稿している(日本からは故大宮真琴、故中野博司が校訂楽譜出版に参画した)。

同研究所の初代学問的責任者は、前述のようにラールセン(任期は1955-1960)であったが、第2代のG.フェーダー Georg Feder (1927-2006、所長としての任期は1960-90)は、楽譜校訂の作成方法に関する徹底した検討を行い、厳格な方法論「音楽文献学」と呼ばれる方法論を確立した(Feder 1983)。前述のように、現在ではA.ラーブが学問的責任者を務めている。

3.4 H. C. R. ランドン

ハイドンの没後200年の2009年11月20日にランドン H. C. Robbins Landon (1926-2009)が没したとき、イギリスの新聞「ザ・ガーディアン」は署名入りの追悼記事を掲載した。「専門分野以外で真の名声を得る音楽学者はわずかしかない。しかし83歳で逝去したHC[原文ママ]ロビンズ・ランドンは、学界の外の幾多の人々に知られていた。(中略)彼の声望はヨーゼフ・ハイドンの先駆的な研究によるものだが、この研究が支えとなって1950年代までは大半が未知であったこの作曲家の作品が不朽の名作となったのである。(中略)彼は肉体的にも知的にも巨人であった(Millington 2009)」。

ボストンに生まれ、地元の大学でガイリンガーに学んだ後、兵役のためにオーストリアに駐在した彼は、退役後もハイドン研究のためにウィーンに残った。彼は未知に近かったハイドンの作品の楽譜出版とレコード録音を進めるために「ハイドン協会」を設立したが、交響曲の楽譜を2巻刊行したところで頓挫した。

29歳の年にあたる1955年には800ページを超

える『ハイドンの交響曲』を出版した。ここでランドンは、詳細な資料研究にもとづいてハイドンの真正の交響曲を特定し、作曲順を推定した。これによりハイドンの交響曲創作の全容がかつてなく正確に把握できるようになった(Landon 1955)。4年後の1959年には独自に収集したハイドンの書簡を英語に翻訳し、出版した(Landon 1959)。ちなみにD.バルタ Dénes Barthaが編集した原語のドイツ語版の出版はその6年後であった(Bartha 1965)。その後、新たな書簡の発見も幾度かあったものの、この書は今日なお基本文献に数えられる。また、1962年からは(ヨーゼフ・ハイドン研究所の『ハイドン研究』に先んじて)『ハイドン年鑑 Haydn Yearbook』の刊行を開始した。この年鑑には、ランドンは1988年まで22巻の編集に携わっている。

1976年から80年にかけて5巻からなる膨大な『ハイドン、年代記と作品』を刊行した。ここには、その時点までのあらゆるハイドン研究を総括するような膨大な情報が多くの写真とともに収められ、さらに未発表の資料も多数掲載された(Landon 1976-1980)³。

他方で、ランドンは楽譜の刊行も精力的に行った。交響曲、クラヴィーア三重奏曲、弦楽四重奏曲の全集を多くは独力で出版した。また、夫人のクリスタ・ランドン Christa Landon (1921-77)のピアノ・ソナタ全集など、他の研究者の協力を得て訂楽譜の編集を急ぎ、しばしばヨーゼフ・ハイドン研究所より早く完成させて出版した。ランドン版の楽譜は演奏者の利便性を考慮して実用のための便宜が図られており、例えばオペラでは、校訂楽譜を上演用レンタル楽譜として提供している。そのほか、レコード録音の監修、ラジオ番組への出演、雑誌やレコードなど一般愛好家向けの解説をも精力的に行った。

研究と啓蒙の両方に比類ない貢献をしたという点で、冒頭の追悼記事は決して誇張ではない。しかし校訂楽譜においてはヨーゼフ・ハイドン研究所の全集が近づくにつれて、正確さに劣るランドン版への信頼性は相対的に低下している。また、

研究書において資料や音楽作品を縦横無尽に操るランドンの博覧強記ぶりには他の追随を許さないものがあるとはいえ、しばしば議論が行方を見失いそうになったり、作品分析が表面的に終わったりすることがあるなど、新しい研究者たちが精密な議論を展開する昨今では影響力が次第に低下している。

4. 新しい傾向の認識 (1990年頃以降)

4.1 A. ラープ

ヨーゼフ・ハイドン研究所の現在の学問的責任者であるラープが、2010年の論文において、近年におけるハイドン研究の多様性の拡大について指摘していることは「序」において示したとおりである。彼は同じ論文の中で、近年の研究に見られる新しい傾向とこれからの課題をまとめている(Raab 2010a)。以下に、その内容を箇条書きにまとめる。

[作品分析に関して]

- ・ハイドン作品の分析において、従来の(すなわち19世紀以降に確立した)楽式論ではなく、音楽理論家 H.C.コッホ Heinrich Christoph Koch (1749-1816)のような同時代の理論に向かうようになった。

- ・ハイドン作品の理解にレトリックの考え方、手法を取り入れるようになった。

- ・これまで研究対象になってこなかった、ハイドンの創作のうち多数を占める分野に対する研究は相変わらず少ない。例えば、126曲のバリトン三重奏曲、429曲のスコットランド民謡の編曲など。

- ・オペラに対する関心が、劇場においても研究においも高まっている。これはハイドン全集の出版によるところが大きいと思われる。

- ・周辺の作品と思われがちな、小規模な多声歌曲についての研究発表や講演が相次いでいる。

- ・全体としては、従来同様、交響曲、弦楽四重奏曲、そしてソナタ(ソナタ形式による他ジャンルを含めて)といった「古典的なジャンル」に作品分析の対象が集中している。

[歴史研究に関して]

・ハイドンの音楽の置かれた文脈にはまだ不明な点が多い。例えば、エステルハーザ家の宮廷生活と初期教会作品の関係、典礼史との関係、宮廷の中での位置づけ。

・エステルハーザ侯爵家の教会音楽の特徴はアイゼンシュタットの宮廷生活にも該当するかもしれないが、エステルハーザでは実質的に教会の活動は維持されなかったのか。

・一般に、ハイドンの音楽が演奏された宮廷の空間内の各々の場所について、私たちが意識している以上に考察を深めなくてはならない。

・アイゼンシュタットでのハイドン作品が、音楽祭の開かれる城の大ホールで演奏されていたという証拠はない。むしろ作品の規模と空間の関係から判断すれば、ハイドン作品はいつも小ホールで演奏されていたと考えられる。こうした視点に立って、G.フェーダーが2004年のアイゼンシュタットにおける学会で、「ハイドン・トポロジー」の重要性を強調していたのは適切だ。

・宮廷音楽と宮廷音楽家の関係は、資料が豊富に残されているために多くの研究者が対象としている。しかし、例えば、ハイドンがウィーンに赴いたときに誰に会うかなど、作曲家周辺の人々との関係については、まだほとんど明らかになっていない。

・受容研究には、多くの研究者が向かうことだろう。

ラープはこのように残された課題を具体的に指摘している。また、ハイドン研究所自身が全集の完成後に向かうべき優先的課題として、新たな書簡集と作品目録の刊行があると述べている。

4.2. J. ウェブスター

「序」において、J.ウェブスターが、ハイドンの作品を美学的に検討できるのは近年の研究成果によるという認識を持っていたことを述べた。彼のハイドン研究におけるテーマは多分野に向かっているため、論文「ハイドンの美学」(Webster, 2005)だけで、彼の視点や今後の研究に対する展

望を述べることはできない。そのため、他の文献にある見解については、「5.3 ハイドン研究の新しい傾向」で改めて述べたい。

ただ以下については指摘しておきたい。すなわち、ハイドンの人柄と音楽の特質の関係についての彼の考察は、フェーダーの「ヨーゼフ・ハイドンの人間と音楽」(Feder 1972)を基礎においており、ハイドンの晩年に彼を訪れた伝記作家たちの著述よりむしろハイドン自身の書簡や蔵書の分析を通して、また(1982年には未開拓だった)当時のオーストリア音楽一般に関する研究成果、あるいは当時の思想や周囲の人たちとの関係等、現存する資料に基づく実証的な研究を進めた結果、可能になってきたということである。

4.3. M. ロウ

「序」に記したように、ロウは2009年をハイドン研究における過渡期と見なし、この数年間に登場した新しい傾向の研究を列挙している。小論ではそれを詳述する余裕はないが、以下に、近年の研究における新しい傾向についての彼女の説明を引用したい。

「現代的なハイドン研究が20世紀中葉に開始され、作品の真正性、年代記、諸資料に関して目覚ましい成果を上げたのに対し、20世紀の最後の10年間は主として、美学、歴史記述、レトリックとしての音楽理解が進展し、過渡期にあたるこの数年間では、ハイドンの生涯や音楽、そして政治、美学、ジャンル、社会的文脈等々の諸環境へと意識を向けた。こうしたことは一世代前にはほとんど想像できなかった(Lowe 2010: 8)」。

5. 分析と考察

5.1 3人の指摘について

「新しい傾向の認識」で挙げた3人のうち、ラープの指摘は次のようにまとめることができる。

1) 歴史的な文脈への回帰。作品分析に関しては、ベートーヴェンに規範を求めるA.B.マルクス Friedrich Heinrich Adolf Bernhard Marx (1795-1866)等による19世紀に確立したソナタ

形式概念ではなく、ハイドンの同時代の音楽理論家 H.C.コッホなどの著作からハイドン作品を分析したり、同様に当時の音楽観に強く影響力を保持していたレトリック（修辞学）的な音楽作品理解を分析に用いたりする傾向が顕著になっていること。2）ハイドン作品では研究対象とされる作品に従来同様の偏りがあり、周辺の作品にも関心を高めなくてはならないこと。3）1770年代中頃からの約10年間における、ハイドンのオペラ作曲家としての重要性は D.バルタと L.シヨムファイ Laszlo Somfai, の著作 (Bartha and Somfai 1960) において指摘されていたが、その後、校訂楽譜の刊行が、現代におけるオペラ上演と研究に貢献していること。4）ハイドンの伝記研究では、とりわけエステルハージ侯爵家時代に、未知の部分が少なからず残されていること。

ウェブスターは、従来から一貫して、ハイドンの歴史的文脈における位置づけの見直しに向けた研究を行ってきた。近年では19世紀の音楽との関連やハイドンの生きた時代の音楽史の見直しといった大局的視点からの主張もあり、この点に関しては「5.3 ハイドン研究の新しい傾向」で述べたい。

ロウは、上記のラーブ同様、近年におけるハイドン研究に見られる変化を強調し、新しい傾向をラーブ以上に詳細に列挙しているが、それらが20世紀中葉に始まる種々の資料研究のあとに実現したことを指摘している点は重要である。この点において、筆者の認識と軌を一にしている可能性は高い。

5.2 資料研究終結の意義

ハイドンの資料研究は、19世紀後半に始まり、20世紀中葉からはハイドン研究所とランドン陣営が覇を競うように体系的な方法で楽譜や書簡などを調査し、資料批判し、その結果としての刊行を進めてきた。その結果、現存する資料に限れば、作品の特徴などを検討する様式研究の素地はほぼ整えられたといえる状態になっている。

ただし、例えばモーツァルトのように自筆楽譜

が多数現存する作曲家と違って、ハイドンの場合、生前の2度にわたる大火事の影響もあり、残存する自筆楽譜は少数に限られている。自筆楽譜が失われた作品において、信頼できる楽譜を作成するためには、印刷楽譜や筆写楽譜を参照することになるが、その際、現代的な校訂楽譜作成の過程に従うなら、それぞれの楽譜の成立過程を明らかにして作曲家の関与の程度を知り、さらに楽譜の内容（テキスト）の徹底した分析と比較を行わなければならない。さらに、校訂楽譜の刊行後にも新たな資料が発掘される場合もあるので、校訂報告において、あらゆる資料の相互関係を系図 *Stammbaum* によって説明し、新発見の資料の相対的な位置づけをする際の準備をしておくことも必要となる。

そのようにして作成されたハイドンの校訂楽譜の意義を確認できる象徴的な例として、弦楽四重奏曲を挙げておこう。ハイドンの弦楽四重奏曲は、彼の作品にあつて例外的なことではあるが、「全集」が作曲家の生前に出版されていた。かつての作曲の弟子であった I.プレイエル Ignaz Josef Pleyel (1757-1831) が出版業に進出し、1801年に、ハイドンみずからが認定する「弦楽四重奏曲全集」を出版したのだった。このときに出版された楽譜は19世紀には、職業的弦楽四重奏団が使用するなどして、ハイドン作品の普及に活用された。しかし、20世紀の資料研究を通して、このときの「全集」とされる83曲のうちには贋作や他のジャンルからの編曲が含まれていることがわかった (Tyson and Landon 1964; Somfai 1965)。それ以前の資料、たとえばホーボーケンの作品目録では、プレイエル版の83曲が無批判的に登録されていたのである (Hoboken 1957)。また、真作のテキストにおいても従来の楽譜には不正確な点が少なからず含まれていることが明らかになった。

これらの問題を解決した資料研究の結果は、ヨーゼフ・ハイドン研究所発行のハイドン全集の楽譜および校訂報告書で最も詳細に確認すること

ができる。また成立史等、個々の作品にまつわる重要な問題は全集の各巻の序文にまとめている。

このようにして、作品の真正性、正確なテキスト、成立史が明らかになってようやく作品研究が説得力を持ち得ることになった。

また、ハイドンの全作品のうちでも生前に印刷楽譜が出版されていたのは、交響曲や弦楽四重奏曲など一部に限定されていたので、後世になってその他の作品を演奏するためには、個々の演奏家が各地の図書館や古文書保管所、教会や修道院等で筆写楽譜を閲覧するしかなかった。しかもこれらの楽譜は、上記の説明で明らかなように、校訂作業を経ておらず、その作品の他の楽譜資料と比較して相対的にどの程度信頼性が高く、正確であるかを判断することは困難だった。

そうしてみれば、 لندنおよびその陣営の研究者たちによる楽譜出版が、その不正確さ故に拙速の批判を浴びることがあったとしても、広くハイドン作品を校訂楽譜として刊行したことは演奏家や一般音楽愛好家にとって大いに価値のあることであった。しかしヨーゼフ・ハイドン研究所の校訂楽譜がほぼ完成に近づいたことで、ハイドンの創作の全容が、今日可能な限り正確なテキストによって知らされることになったことになる。

5.3 ハイドン研究の新しい傾向

ヨーゼフ・ハイドン研究所によるハイドン全集が簡潔に近づいた今日、ハイドン研究がその成果を礎にして、多角化、活性化することは当然のことといえるだろう。先に述べたラーブ、ウェブスター、ロウのうち、ヨーゼフ・ハイドン研究所の学問的責任者であるラーブが資料研究に関する課題を詳述していたのはその立場から当然と見なせる一方、より自由な立場の研究者であるウェブスターとロウの場合には、資料に限定されない研究の可能性をそれぞれに示唆している。

さらに、今後期待される課題には、以下のようにハイドンの創作や評価に関わるより基本的な

認識をも含めることができるだろう。

たとえば、ハイドンの様式変遷を語る場合、1760年代中頃から1770年代初頭にかけての時期を「疾風怒濤 Sturm und Drang」の時代と呼ぶことがあった。これはヴィゼワ(Wyzewa 1909)がこの時期の短調作品の激烈な表現に関して、ハイドンの「ロマン的危機」を主張したことに端を発したもので、20世紀終盤までの文献では一般的な時代区分であった。その後、この時代のハイドンの創作が多角的に研究されてきたために、近年ではこの時期の短調作品だけを抽出してひとつの時代区分とすることを否定する傾向が強まっている。しかし、当時の声楽曲との関係等を視野に入れた近年の研究からは、この時期の短調作品の際だった表現力を認識しつつも、より適切な歴史的な文脈の中に位置づけようとする努力が続いているように思える。

そうした議論の中で、ウェブスターがこの時期の短調作品である「告別」交響曲(1772)を取り上げて分析し、この作品の構成がベートーヴェンの「運命」交響曲の先駆けとなっていることを主張した(Webster 1991; 179ff)。この研究の成果はまだ十分に議論されたとはいえないかも知れないが、この問題意識からは、ハイドンとその後の時代との関係を見直す可能性が開けてくるかも知れない。

今後の研究への可能性を示唆する点で、より高い一般性を帯びた主張がある。これもウェブスターによるもので、彼はハイドンの初期作品の見直しを18世紀音楽史の把握の仕方そのもの見直しに通じるとしている。すなわち、彼によれば、音楽史における「バロック時代」を従来の1750年すなわちJ.S.バッハ Johann Sebastian Bachの死の年で終わらせるのではなく、1670年頃から1720年頃までを「後期バロック」と改めて区分し直し、1720年頃から1780年頃までを「18世紀中期」、そして1780年頃から1830年頃までを18世紀の3つめの時期としている(Webster 2004)。

このように、「ハイドン全集」の終結を間近に控えた今日、これからのハイドン研究の課題を概観するならば、伝記および様式研究の欠落部分の多さが再確認できる一方で、作品理解のための文脈が拡張されて多様な可能性が開かれていることがわかる。また、ハイドンの様式変遷の再検討を通して、続く時代の作曲家との関係や「古典派」という音楽史上の区分に関わる根本的な検討の可能性もが開かれてことを確認することができる。

注

(1) 小論に類似した視点は、ロウの論文(2010)からも読み取ることができるように思える。

(2) <http://www.haydn-institut.de/index.html>、http://www.haydn-institut.de/JHW/JHW_Reihen/jh_w_reihen.htmlおよび <http://www.haydn-institut.de/Haydn-Studien/haydn-studien.html> 2016年9月28日閲覧。

(3) この5巻は、書評を兼ねたある論文において、単独の著作に限れば、これまでのポールによる3巻の『ヨーゼフ・ハイドン』に代わって、ハイドンの生涯、音楽、歴史的・文化的脈絡についての記述に関しては当面の間、基準となる研究となるという評価がなされた(Webster 1982: 476)。年とともに修正の必要は増大するが、基本的にこの認識は、今日なお一般的なものである。

引用あるいは言及した文献

一次文献（原著とそのウェブ版、翻訳）

- Bartha, Dénes ed. 1965. *Joseph Haydn: gesammelte Briefe und Aufzeichnungen: unter Benützung der Quellensammlung von H.C. Robbins Landon*. Kassel: Bärenreiter.
- Carpani, Giuseppe. 1812 *Le Haydine, ovvero Lettere su la vita e le opere del celebre maestro Giuseppe Haydn*, Milan: Buccinelli.
- Dies, Albert Christoph. 1810. *Biographische Nachrichten von Joseph Haydn*. Vienna: Camesinischen Buchhandlung.
アルベルト・クリストフ・ディース著：ホル

スト・ゼーガー編；武川寛海訳。1978.『ハイドン：伝記的報告』東京，音楽之友社。

Griesinger, Georg August. 1809. "Biographische Notizen über Joseph Haydn", *Allgemeine musikalische Zeitung*, xi, Leipzig, 641-9, 657-68, 673-81, 689-99, 705-13, 721-33, 737-47, 776-81; also published separately, 1810. Leipzig: Breitkopf und Härtel.
同書ウェブ版
<https://play.google.com/books/reader?id=xF9RAAAAcAAJ&printsec=frontcover&output=reader&hl=ja&pg=GBS.PP1> 2016年9月28日閲覧。

Landon, H.C. Robbins [Compiled and translated by]. 1959. *The collected correspondence and London notebooks of Joseph Haydn*, London: Barrie and Rockliff.

Larsen, Jens Peter ed. 1941, 1979/R. *Drei Haydn Kataloge in Faksimile mit Einleitung und ergänzenden Themenverzeichnissen*. Copenhagen and New York: Pendragon Press.

二次文献

- Bartha, Denes and Laszlo Somfai. 1960. *Haydn als Opernkapellmeister*. Budapest: Verlag der Ungarischen Akademie der Wissenschaften
- Brown, A. Peter and T. Berkenstock in Zusammenarbeit mit Carol Vanderbilt Brown. 1974. "Joseph Haydn in literature. A bibliography", *Haydn-Studien*, III/3-4: 173-352.
- Jacobs, Helmut C. 2010. "Carpani, Giuseppe", *Das Haydn-Lexikon*, ed. by Armin Raab, Christine Siegert and Wolfram Steinbeck, 141f. Laaber: Laaber Verlag.
- Feder, Georg. 1972. "Joseph Haydn als Mensch und Musiker", *Jahrbuch für österreichische Kulturgeschichte*, ii: *Joseph Haydn und seine Zeit*, 43-56.
- _____. 1983 Textkritische Methoden. Versuch eines Überblicks mit Bezug auf die Haydn Gesamtausgabe. *Haydn-Studien*. V/2:

- 77-109.
- Friesenhagen, Andreas. 2010. "Griesinger, Georg August", *Das Haydn-Lexikon*, ed. by Armin Raab, Christine Siegert and Wolfram Steinbeck, 282f. Laaber: Laaber Verlag.
- Geiringer, Karl. 1932. *Joseph Haydn*, Potsdam: Akademische Verlagsgesellschaft Athenaion. (Die grossen Meister der Musik)
- _____. 1946, enlarged in collaboration with Irene Geiringer. 3/1982. *Haydn: a Creative Life in Music*, Berkeley: University of California Press.
- Hoboken, Anthony van. 1957-78, *Joseph Haydn: thematisch-bibliographisches Werkverzeichnis*, i: *Instrumentalwerke*; ii: *Vokalwerke*; iii: *Register: Addenda und Corrigenda*, Mainz: B. Schott's Söhne.
- Jones, David Wyn ed., Otto Biba consultant ed. 2002, *Oxford composer companions Haydn*, Oxford and New York: Oxford University Press.
- Landon, H.C. Robbins. 1955. *The Symphonies of Joseph Haydn*. London: Universal Edition, supplement. 1961. London.
- _____. 1976-1980. *Haydn: Chronicle and Works*, 1. *Haydn: the early years, 1732-1765* – 2. *Haydn at Eszterháza, 1766-1790* -- 3. *Haydn in England, 1791-1795* -- 4. *Haydn: the years of 'The Creation', 1796-1800* -- 5. *Haydn: the late years, 1800-1809*. London: Thames and Hudson.
- Larsen, Jens Peter. 1939. *Die Haydn-Überlieferung*. Copenhagen: Ejnar Munksgaard.
- _____. ed. 1941; Eng. trans., rev., 1989. *Drei Haydn Kataloge in Faksimile mit Einleitung und ergänzenden Themenverzeichnissen*, New York: Pendragon Press.
- Lowe, Melanie. 2010. "The Art of Transition: After Haydn Year 2009", *The Journal of Musicology*, 27/1: 1-8.
- Millington, Barry. 2009. "HC Robbins Landon obituary", *The Gurdian*, London, 24 November 2009.
- _____. <https://www.theguardian.com/music/2009/nov/24/hc-robbins-landon-obituary> 2016年9月28日閲覧。
- Pohl, Carl Ferdinand. 1867. *Mozart und Haydn in London, ii: Haydn in London*, Vienna: Gerold.
- _____. 1875. *Joseph Haydn*, i. Berlin: Sacco, ii. Leipzig, 1927. iii. Leipzig, (completed by H. Botstiber)
- _____. 1879. "Joseph Haydn", *A dictionary of music and musicians*. ed. by G.Grove and J.A. Fuller Maitland, 702-722. London: Macmillan.
- Raab, Armin. 2002. "Haydn-Bibliographie 1991–2001", *Haydn-Studien*, VIII/2, 79–216.
- _____. 2010a. "Perspektiven der Haydn-Forschung nach dem Abschluss der Gesamtausgabe", *Studia Musicologica*. 51, 3/4: *Haydn 2009: a Bicentenary Conference part ii*, 243-258.
- _____. 2010b. "Pohl, Carl Ferdinand", *Das Haydn-Lexikon*, ed. by Armin Raab, Christine Siegert and Wolfram Steinbeck, 594. Laaber: Laaber Verlag.
- _____. 2010c. "Geiringer, Karl", *Das Haydn-Lexikon*, ed. by Armin Raab, Christine Siegert and Wolfram Steinbeck, 259f. Laaber: Laaber Verlag.
- _____. 2010d. "Larsen, Jens Peter", *Das Haydn-Lexikon*, ed. by Armin Raab, Christine Siegert and Wolfram Steinbeck, 451f. Laaber: Laaber Verlag.
- _____. 2011. "Haydn-Bibliographie 2002–2011", *Haydn-Studien*, X/2, 119–325.
- Somfai, László. 1965, "Zur Echtheitsfrage des Haydn'schen "Opus 3"", *Haydn Yearbook* III, 153–65.
- Tyson, Alan. and H.C.R.Landon. 1964. "Who Composed Haydn's Op.3?", *The Musical Times* CV/1457, 506f.
- Walter, Horst. 1985. "Haydn-Bibliographie 1973–1983", *Haydn-Studien*, V/4, 205–293.

- _____. 1992. "Haydn-Bibliographie 1984–1990",
Haydn-Studien, VI/3, 173–238.
- _____. 2010. "Dies, Albert Christoph", *Das
Haydn-Lexikon*, ed. by Armin Raab,
Christine Siegert and Wolfram Steinbeck,
152f. Laaber: Laaber Verlag.
- Webster, J. 1982. "Prospects for Haydn Biography
after Landon", *The Musical Quarterly*,
68, 4, 476–495.
- _____. 1991. *Haydn's 'Farewell' Symphony and the
Idea of Classical Style: Through-
Composition and Cyclic Integration in his
Instrumental Music*, Cambridge and New
York: Cambridge University Press.
(Cambridge studies in music theory and
analysis: 1)
- _____. 2001. "Joseph Haydn", *The New Grove
Dictionary of Music and Musicians*,
second edition, ed. by Stanley Sadie,
London: Macmillan.
- _____. 2004. "The eighteenth century as a
music-historical period?", *Eighteenth
Century Music*, I/1: 47–60.
- _____. 2005. "Haydn's Aesthetics", *The Cambridge
companion to Haydn* ed. by Caryl
Clark, 30–44. Cambridge: Cambridge
University Press. (Cambridge
Companions to Music)
- Wyzewa, Théodore de. 1909. "A propos du centenaire
de la mort de Joseph Haydn", *Revue des
deux mondes*, V/51: 935–46/

On a recent change in the Haydn research

Toyomi IIMORI*¹

Synopsis

Some Haydn scholars have pointed out an obvious change in Haydn research is seen toward the end of the 20th century.

History of Haydn research began in the latter half of 19th century. After J.P. Larsen (1939), systematic research of the material - i.e. notes and various documents of Haydn and his contemporaries - all over the world was accelerated in the latter half of the 20th century. Consequently, most volumes of Gesamtausgabe (complete works), letters, and other documents were published by the end of the century. Based on these publications new trends of Haydn research began to appear, but end goal of these trends is still unclear. The author analyses these trends and points out some tendencies and possibilities in Haydn research.

..... **Key words**

J. Haydn, research, change, Gesamtausgabe

* 1 Faculty of Liberal Arts Kaichi International University

KAICHI INTERNATIONAL UNIVERSITY Bulletin No.16